

## 院内急変におけるNEWSの有用性 —ハリーコールを分析して—

久保田 忍<sup>1)</sup> 柳原 典枝<sup>1)</sup> 若田 きみ子<sup>2)</sup>  
加藤 雅康<sup>3)</sup> 白子 隆志<sup>1)</sup>

1) 高山赤十字病院 救命救急センター

2) 高山赤十字病院 医療安全推進室

3) 高山赤十字病院 救急部

### 【目的】

過去5年間の院内ハリーコール（以下ドクターハリー）事例の実態を明らかにし、今後の課題をまとめる。

### 【調査方法】

期間：2012年1月～2017年12月。方法：Dr.ハリー報告書、電子カルテから後ろ向きに調査。

### 【結果】

5年間のドクターハリーは59件、男性36名、女性23名だった。年齢は1歳～94歳、70～80歳代で60.8%を占めた。小児（1歳～7歳）は4名で全て救命センター入院中だった。発生場所は一般病棟34件、救命救急センターが19件、外来、CT室等が6件だった。ドクターハリー要請原因は呼吸不全が18件30.5%、心肺停止14件23.7%、致死的不整脈、循環不全が22%であった。それ以外に意識レベル低下、痙攣発作だった。その後の転帰は、軽快49.2%、死亡39%、1週間の生存8.5%、1ヶ月の生存3.4%。

看護記録で経時的に検証できた成人24名をNEWS（National early warning score）を用い、急変8時間前、4時間前、1時間前の変化を調査した。8時間前に中等度以上の急変リスクが認められたのは62.5%だった。また急変前1～8時間までの最高得点を抽出したところ、高度リスクは16件67%、中等度リスクは5件21%だった。最高得点だけに注目すると88%の患者が急変するリスクが高い可能性があることが分かった。しかし8時間前からの時間経過と点数の推移は統一性が明らかにならなかった。高度リスク状態であっても状態が軽快した患者、中等度リスクであっても死亡に至った患者もおり、予後に関しては点数と相関した明らかなデータは得られなかった。

### 【考察】

院内急変は看護師が第一発見者となる事が多い。記録を経時的に見直した際、全ての項目を点数化できず評価できなかった症例があった。特に呼吸数、呼吸状態の記録が他項目に比べ少ないことが分かった。看護師が「何か変」と違和感を感じた時、客観的に評価できるNEWSを用いることで、急変の可能性や異常な状態を判断することができる。

### 【結語】

常に患者のそばにいる看護師が急変兆候に早期に気づかなければならない。NEWSを用いた急変兆候の早期発見について継続的な看護師教育の必要性が示唆された。

### 【参考文献】

1. Rapid Response System. 日本集中治療医学会・日本臨床救急医学会.
2. 西島功他：修正早期警戒スコア（MEWS）による患者急変予知は、迅速対応システム（RRS）の起動件数を適正にし、かつ院内心停止を減少させる。日本臨床救急医学会誌. 20. 534-8. 2017.
3. 桐本千恵美他：急変振り返りによる変化と課題～RRS（Rapid Respons System）の活用と急変前の患者状況からの考察～日本救急看護学会学会誌. vol.19.241. 2017.
4. 鹿山美穂他：院内急変対応の現状と課題～急変対応報告書から見えること～. 日本臨床救急医学会誌. vol.19.386. 2016.